地域を支え、地域に支えられてきた老舗のシャッターメーカー

「人喜んでこそ商いなり」の思いを胸に、古き良き時代を取り戻したい

株式会社中央シャッター
代表取締役
市川　慎次郎 いちかわ　しんじろう

株式会社中央シャッター　代表取締役　市川 慎次郎

「人喜んでこそ商いなり」の思いを胸に、古き良き時代を取り戻したい

もし店舗や会社のシャッターが壊れてしまったら、営業もままならなくなるなどの致命傷になりかねない。そんな予期せぬアクシデントに素早く対応してくれ、状況を解決してくれる頼りになる存在が地域にあるのは実に心強いだろう。中央シャッターは、足立区で1970年に創業以来、地域の店舗や会社のシャッターに関するトラブルを解決してきた専門メーカーだ。創業者である先代社長の市川文胤氏が買いてきた「地域の人とのつながり」を受け継ぎ、確かな歩みを続ける２代目社長の慎次郎氏に、事業に賭ける思いを聞いた。

― 御社の事業内容を教えてください。

1970年の創業以来、主に店舗や会社の上下シャッターの修理・製造販売・施工・メンテナンスを行っています。東京・千葉・埼玉・神奈川の１都３県で、中でも城東６区を中心に地域に根差した活動を重視してきました。

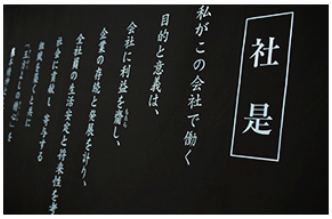
昔はシャッターのメーカーは足立区だけでも30社以上ありましたが、大手の進出などで淘汰が進み、いま区内に残るのは当社を含めて２社だけ。その中で、半世紀弱にわたって地元の方々に可愛がっていただいています。

― 創業の経緯を教えてください。

父である創業者の市川文胤は、鉄工所を経営していた祖父の三男として生まれました。若い頃から自分で事業を興したいと思っていたようで、タクシーの運転手の仕事で昼夜を問わず働き、３年で300万円の事業資金を貯めたそうです。

そして、何の事業をしようか…と思っていたときに、知り合いからシャッターの塗装の仕事の話をもらったそうです。塗装であれば、それほど専門的な技術がなくても塗れる…そう考えて始めたのが最初のきっかけで、これが中央シャッターの前身になりました。

やがて塗装以外にもシャッターの修理の依頼が入るようになり、仕事の幅を広げていきました。テントの修理も請け負うようになり、やがて工場を開設して、上下シャッターのメーカーとしての機能を持つようになったんです。



― どうやって業容を広げていったのでしょうか。

修理を請け負うには、当然職人さんの技術が必要です。でも当時は現場の職人は「腕さえあればいい」という感じで、時にはお酒を飲みながら作業をしていたような時代でした。

同じ仕事を頼んでも会社によって金額がまちまちで、変に几帳面な先代は、そんな業界の風習がすごく嫌だったようなんですね。そんなところに自分のお客さんを紹介したくないと考えて、自分の会社で修理もやれるように、自社で職人さんを育てていったようです。

社員もどんどん増やしていきましたが、時には街をふらふらしていた人に、「遊んでるんだったらうちに来ないか」と仕事を世話して面倒をみるようなこともあったそうです。

まさに困っている人を放っておけない性格で、そんなところがシャッターの修理という仕事にマッチしていたのかも知れません。当時は経験のない修理の仕事も「うちでできるよ」と軽く引き受け、予想以上に手間がかかって結局赤字…ということも少なくなかったそうです。

また仕事を辞める会社があれば、そこから社員として雇い、機械も買い取ってあげて、自社の設備もそろえていったといいます。そうやって人も設備もそろえながら、業容も広げていったということですね。

プロフィール

お名前
市川 慎次郎

お名前（ふりがな）
いちかわ しんじろう

趣味
仕事、家族と一緒にいること

座右の銘
出会いに感謝

尊敬する人
創業者である父

尊敬する経営者
市川 文胤（父）

好きな食べ物
家内の手料理

休日の過ごし方
家族と一緒に居る

出身校
中国語言文化大学

「助けてあげるのが先、利益は後からついてくる」

プロフィール

お名前
市川 慎次郎

お名前（ふりがな）
いちかわ しんじろう

趣味
仕事、家族と一緒にいること

座右の銘
出会いに感謝

尊敬する人
創業者である父

尊敬する経営者
市川 文胤（父）

好きな食べ物
家内の手料理

休日の過ごし方
家族と一緒に居る

出身校
中国語言文化大学

― 御社が長年にわたってお客様から信頼を集めてきた理由は何だと考えますか。

やはり地域の人とのつながりを大事にしながら、小さな取り組みを真摯に続けてきたことが一番ではないでしょうか。

とにかく創業以来、先代は「困っているんだから助けてあげるのが先だろ。利益なんて後からついてくる」と口癖のように言っていました。

創業してすぐ、浅草の呉服屋さんが、年末の30日にシャッターが閉まらなくなって困っていたことがありました。修理の依頼に、電話帳を見ながら28件電話をかけたけどどこも出ず、29番目に電話をかけたのがうちで、先代が飛んでいって直してあげたんです。

店主のおばあちゃんからは、「もう店で年越しをしないといけないと覚悟していた矢先につながった」と大いに感謝されました。

それ以来、当社では年末は30日まで営業することを恒例にして、全社員でその日に餅つきをして地元の方たちに振る舞いながら、感謝の気持ちをお伝えしてきました。

こうした行いの積み重ねで、地域の人とのつながりを大切にしてきたことが、当社が成長できた一番の要因だと思います。

― ほかにもあれば教えてください。

もう一つは、どんなに小さな仕事や人が嫌がる仕事も、「喜んで」の精神で受け続けたことです。大手企業がやらないようなちょっとした修理、緊急のトラブルであっても、「困っているのだから何とかしてあげたい」との気持ちでお受けしてきました。

また他の企業であれば買い替えを進めるようなケースでも、当社では出来る限り修理を勧めることが多くあります。そのほうがお客様にとってもコストの負担が少なく、喜んでもらえます。そうした関係のなかで、長いお付き合いをしていきたいという思いがあるんです。

― そうした行動は、どのような教えからきているのですか。

私は小さいころからずっと、二宮金次郎の教えで知られる「たらいの水」の話を先代から何度も聞かされてきました。たらいの水を自分の方に引き寄せようとすると、水は向こうに逃げてしまうけど、相手にあげようと押すとこちらに返ってくる。相手のために尽くしていると幸せは自然とやってくるという教えです。

去年のことですが、地元の居酒屋さんの電動シャッターが開かなくなり、モーターの交換が必要になったものの、入荷するまで３日かかり、このままでは店を開けられない…という状況になったことがありました。そこで自社工場のシャッターで使っているモーターを外して持っていき、応急処置で交換して開店に間に合わせたのです。

こうしたことを当たり前にする教えとして、「商いは“益”を求めて商いならず、人喜んでこそ商いなり」という当社の社訓があります。商売は利益を求めるのではなく、お客様が喜ぶことの結果が利益になるというもの。まさに先代がずっとこだわってきた教えであり、これからも大切にしたいと思っています。

遺志を受け継ぎ伝承し「先代の証明」を成し遂げたい

プロフィール

お名前
市川 慎次郎

お名前（ふりがな）
いちかわ しんじろう

趣味
仕事、家族と一緒にいること

座右の銘
出会いに感謝

尊敬する人
創業者である父

尊敬する経営者
市川 文胤（父）

好きな食べ物
家内の手料理

休日の過ごし方
家族と一緒に居る

出身校
中国語言文化大学

― 市川代表が２代目の社長に就任した経緯を教えてください。

先代が急逝したことで、2012年12月に私が社長を引き継ぐことになりました。それまでもある程度経営に携わっていたのですが、実は私は、社長という仕事にずっと興味を持てずにいたのです。

自分には先代がもっていたようなカリスマ性はないし、むしろナンバー２の立場で会社を支える参謀の役回りを担いたいと思っていました。ですから先代が急に亡くなり、自分がその立場を継がなくてはならなくなった時も、「仕方ないから自分がやる」という感覚から抜け切れないでいたのです。

社長に就任して最初の半年はずっとそんな気持ちで、何か問題が起きても「じゃあお前が社長やれば」などと平気で口にする始末。今思うと本当にひどい社長だったと思います。

それがある晩、考え事をする中で、「経営者なんだから重いものを背負うのは当たり前」と思えた瞬間があったんです。なぜかふっと肩の力が抜け、同時に社員にとって、自分がいかにお粗末な社長であるかに気付かされたのです。

それ以来、私は社員のみんなに、いつか「うちの社長は立派なもんだ」と言わせたいと思って、それを自分の禊であり、今の目標として仕事をしています。なぜあの時、そんな思いになれたのか今も不思議なのですが、社長としての意識も大きく変わることができました。

― ２代目社長として大切にしている思いは何でしょうか。

先代のお客様や社員に対する考え方、遺志をしっかりと受け継ぎ伝承していくこと。それを「先代の証明」として大切にしていきたいと思っています。

むかし先代との会話の中で、苦しかった時代の借金を返し、「このまま無借金会社を目指そう」と話したとき、小さく笑いながら「そうだな」と答えたのを覚えているんです。

私はそれを、先代との約束ととらえています。教えてくれた通りに経営を実行し、日本のごく一部の企業しかない無借金会社という約束を果たすことができれば、先代がやってきたことが正しかったと自分が証明できると思うのです。

先代はいつも言っていました。「相手の心を動かさなければビジネスにはならない」「心を動かすには、まず先に相手のことを思いなさい」。いま社長の立場になって、その言葉の重みが分かります。

今でも親父の墓参りに行くと、いろんな答えを授けてもらえるような気がします。不思議と、知らないうちに勇気をもらえていることがあるんですよ。

― 今後のビジョンを教えてください。

今後に向けて、「山賊から武士へ」「古き良き時代の復活」という２つのテーマを掲げています。昔から「衣食足りて礼節を知る」と言いますが、当社も業容が整い、いわば衣食が足りてきたので、これからは礼節を覚える段階だと思っています。

「腕もあるし品もある」武士として、身なりや挨拶などの細かい部分をひとつずつ見直し、周りの人が憧れる会社になることを目指したいですね。

そして、「古き良き時代の復活」とは、いま日本で忘れられつつある「お互いさま」の精神を、私たちが率先してこれからも実践したいとの思いです。

これまで培ってきた人とのつながりをさらに大事にすることで、そうした思いが少しでも周りに飛び火してほしい。それが、かつての日本の「古き良き時代」を取り戻すことに繋がればいいなと思っています。

■ 市川 慎次郎 （いちかわ しんじろう）
1976年、埼玉県生まれ。高校卒業後、中国の清華大学へ留学し、北京語言文化大学の漢語学部、経済貿易学科を卒業。帰国後、父の経営する株式会社中央シャッターに入社。父の下で創業者の精神を叩き込まれ、総務部部長・経理部部長を兼務し、当時9億円を超えていた負債を圧縮して会社を立て直した。2012年、父の急逝を受けて代表取締役に就任。先代社長の遺志を受け継ぎ、地域とのつながりを大切にする着実な経営で安定した業績を残している。